

いなほ

第 120 号

2022 年 1 月 31 日

NPO 法人萌

代表 波多江文哉

横浜市戸塚区深谷町 893-2

小型事業所 工房いなほ

相談支援事業所 ふかや

グループホーム 独歩

TEL045-443-7416

URL <http://www.mo-e.jp>

追悼

「桜が咲く季節に亡くなりたい」。前理事長はよく口にしていた。2021年9月にすい臓がんと診断され入退院を繰り返していた。癌から来る痛みの中で、耐え忍んでいた。「自分はもう終わりだよ」「今年が最後の正月だ」と聞いた際、何も返す言葉が無かった。言葉は無力でしかなかった。

寝る時間が増えていく中でも、寝室から居間に来ることが亡くなる前日まで続けていた。それが前理事長の考える「生活」だったように思う。

月曜日と金曜日は萌に行くと自らに課していた。最後に萌に行ったのは雪が降った次の日の1月7日だった。それから1週間後の2022年1月18日に家族と職員、理事に見守られながら亡くなった。67歳だった。毎日自転車でいなほに来る姿はもう見ることはない。当たり前のように居るという日常生活から姿が無くなり、事実だけが残った。

55歳で萌を立ち上げ、約10数年理事長を勤めて来た。性格的には理事長という役職がどれだけ、苦難と試練を強いて来たのだろうか。その歳月は萌に捧げ、人生を彩り、前理事長の人生観や世界観が形として残していく営みだった。

以前、私が同友会の礎という研修に参加した際に、同友会OBから「萌はロマンの会社」と言わされたことを覚えている。前理事長はロマンを持っていた。そのロマンが高ければ高いほど現実との乖離が増していく。その乖離の中で引き裂かれているように見えた。経営や利用者、職員との間にその引き裂かれて姿が現れていたように思う。「周囲は醜い。自己も醜い。そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい。」

その様な心境を抱きながらも、支えとなつたのは理念と福祉の思想だったようと思える。蝋燭のように弱々しくも消えることのない力強い炎だった。

憂いと嘆き、一縷の望みを最期まで抱き続けていた姿はもう見られない。その姿は「見ようとなれば見えず、聞こうとなれば聞こない」世界にある。

前理事長が私に残した言葉は経営と福祉事業の在り方、福祉哲学の必要性であった。私の使命は事業を引継ぐだけでなく、想いを引き継ぎながら、理念を実現していくことだと思う。「自分の理念を作れ」と言った言葉は忘れない。(波多江文)

2011年 中小企業同友会 39部会で経営理念を作る

「鳥は空へ

魚は水へ

人は社会の中に

私たちは共に自分らしく生き こころ豊かなる未来を実現します」

10年間これを心に刻み萌の発展のため尽くす。理念こそが大切と。

3月まで生きていたい。が口癖だった。
2022年1月18日22時17分 脳頭部癌
で自宅にて永眠する。享年67歳



撮影 波多江伯夫



心配は萌のことだけ。口にしたのも、萌のことばかり。
「今月は黒字か？工房いなほはもっと福祉に力をいれて。
アセスメントが基本なんだ。人に対してはっきり言える
力と、見立てを立てて仕事はしなくてはいけない。」職員に伝えろ。

意識があるときには萌の事しか言わなかった。
理事長のことをしばしば呼んでいた。心配で仕方なかつたようだ。

今後ともまだ若い理事長を盛り立て萌へのご支援よろしくお願いします

波多江久美子

変貌するグループホーム

厚生労働省はグループホームの実態調査の報告を踏まえて、共同生活援助についての検討会の報告を公表した。グループホームの数は施設入所数を超えて定着したが、グループホームの入居者の重度障害者の数や高齢化の問題、精神科病院などの地域移行の問題、一人暮らしの推移の問題の3点を中心に、特に障害者権利条約による「自分の好きなところに住みたい」という観点からの討論がなされた。

重度障害者(障害支援区分4以上)のグループホームへの入居者は少なく、65歳以上の高齢障害者の老人施設の入居にも難しく、対応も専門性が問われて難しい。地域移行もグループホームを中心として自立生活援助から地域定着支援への流れはあるものの進んでいないのが現状であるようだ。グループホームの大半が、障害支援区分4以下の障害者が半永久的に暮らしているのが現状であるようで、そこでおおむね3年間の入居を決めている通過型グループホームの東京モデルを引き合いに出している。

福祉のニーズは多様化している。医療ケア、難治ケア、重度障害者、高齢障害者、精神障害者の地域移行、職場定着支援などである。多様化するニーズには財政的負担が大きく、社会保障費の伸びを誘発することになる。またグループホームの再編の時期を迎えようとしている。施設入所者数を超えたグループホームは、地域に定着したことになり、実態を調査して、現在のニーズに答えるように再編の検討が始まったということだろう。

グループホームは「地域で暮らしたい」という障害者や支援者の声によって展開されてきた。大半のグループホームは、入居者10名で男女別の玄関が1つで、室内にリビング、食堂、浴室、トイレ、洗濯室が完備され、個室の部屋がある。いわゆる社員寮のホームで(箱型と呼んでいる)である。ひとり暮らしのためのサテライトは、グループホーム1つだけ設置することが認められている。支援者は24時間体制となっている。

利用者は日中活動として働きに行っている。食事は用意され、必要とあれば金銭管理や通院同行もするし、生活支援も行う。一人暮らしの支援は本人の意思がないと難しい

重度障害者の受け入れや高齢障害者の対応、精神科病院からの受け入れ、一人暮らしへの移行などのニーズに答えるためのグループホームの再編の時期を迎えようとしている。3年ごとの報酬単価の見直し、5年に一度の法改正という流れの中で、この問題は整備されていくことは確実である。再編には報酬単価の見直しとなって現れるだろう。とくに通過型のグループホームの東京モデルは、強力な後押しとなると推察される。

機能型のグループホームと通過型のグループホームに対応するためには、新しいグループホームのモデルが必要となる。食事支援、金銭管理や健康管理の支援、家事援助などは継続的な生活支援である。それらを踏まえ、地域で孤立化を防ぐ地域生活支援を包括した地域モデルを立案しなくてはグループホームは生き残れないようだ。(波多江伯夫)

遺稿

名古屋に住む次男への手紙 2021年8月 波多江伯夫記

コロナが猛威を振るっている。飲食業者は悲鳴上げて、バタバタと倒産している。3密と関係ない業種は収益を上げている。オリンピックは聖域となって特権化され、その中で、社会の状況など意識の外にあるアスリートは懸命に金メダルを目指している。国民はテレビで観戦して楽しんでいる。ワクチン接種の供給も計画性ではなく場当たり的で、効果も宣伝したほどではないことも分かってきた。度重なる緊急事態宣言にも呆れて、だれも守らない。コロナの猛威は天井知らず、医療を受けられず自宅で亡くなっていく人が増えていくと担当医療者は危機感を叫ぶ。コロナとは関係ない大半の医療機関はわれ関せず。既得権を積み上げてきた社会はもう一步で崩れていくよう見える。オリンピック後の社会は、コロナ猛威でどうなるのであろうか。分かっていることは、日本人の得意である無責任の環であろう。そして出てくる言葉は、自助、共助、公助という得意の日本型福祉論である。自分のことは自分で責任をとれ、できなければ家族や親せきなどに頼め、国に泣きつななどということだろう。

夏野菜を送る。お盆が過ぎると秋野菜の準備が始まる。今年こそはキャベツを作ろうと思って、種をまいたが水やりをしなかったために失敗。いま再び種をまいて朝晩水やりをしている。芽が出れば 60%成功なのだが。ニンニクと玉ねぎの収穫後に小豆を植えた。順調に育っている。心配なのは台風で直撃されると倒れて収穫できないことだ。10月に収穫予定。小豆で羊羹を作ろうと思っている。加工品は日持ちがする。今回送った羊羹は、市販の小豆で作ってみた。初めての羊羹作りだった。道具や作り方が分かったので応用ができる。冬は有機の小豆で本格的に作る。またサツマイモの芋羊羹も作ってみようと思う。和菓子も面白い。大豆も順調に育っているので、冬は味噌つくり。新潟から取り寄せた味噌が美味しかったので、麹を取り寄せて新しい味噌を作る予定。食べられるのは 2 年後だけど。イチゴジャムは好評だったので、イチゴ畑を 3 倍にした。秋にイチゴ苗を植えれば春にイチゴが大量にとれる。梅酒、梅シロップ、ビワマーマレードも春には完熟して食べられるようだ。

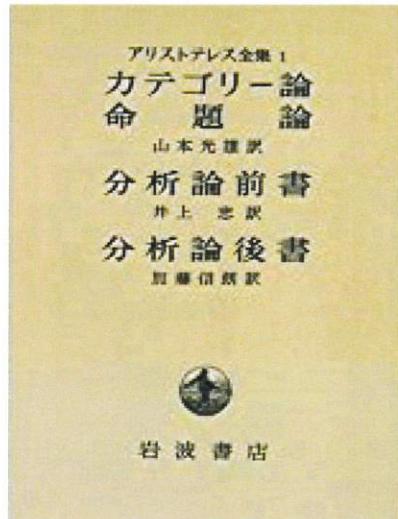
世の中が騒ぎ立てようが、畑にいいると楽しい。福祉も個人を相手にして面接して話を聞いて解決方法を考える。障害者や家族、関係者たちから見た世間が見えてくる。いいも悪いも見ている世間と付き合わなくてはならない。最良の解決を探す。あるのは自分の頭だけだ。自分で考える。いつも成功することはない。情けない障害者や家族が多い。自立させない親や自立も分からぬ当事者たち。それでも暮らしている。この社会の幅広さと豊かさをいつも実感している。

私の読書

アリストテレス「オルガノン アリストテレス全集1」(岩波書店)

2500年前(紀元前500年)、タレスから始まったと言われるギリシャ哲学。とくに2300年前、ソクラテス、プラトン、アリストテレスが活躍した時代が頂点を迎えることになる。アリストテレスはギリシャ哲学の集大成ともいわれ、のちのヨーロッパ哲学に絶大な影響を与えた。

オルガノンとは思考の道具の意味で、アリストテレスの論理学の諸著を総称した名称。分析論(分析論前書、分析論後書)、カテゴリー論、命題論、トピカ、詭弁術論を指す。トピカと詭弁術論は議論をかわす弁証法(帰納法)の論理学である。



古代人アリストテレスは、水、火、土、風の元素で自然の仕組みを説明しようとしたが、それだけでは説明しきれないと考え、新しい5番目の元素、知性(認識、学習、記憶、発見)などを司るものを考えた。それが論理学、自然科学、形而上学、倫理学などであった。

古代人アリストテレスを読むには、現代人である私たちからみれば、そんなことは知っている、時代遅れと思うことは多々ある。しかし、視点を変えて、古代人アリストテレスが生きた世界に沿って読めば、思索とは何か。考える原理とは何かが見えてくる。

アリストテレスは、師匠プラトンのイデア論(永遠なるもの)を支持しながらも、運動する事物に対して、一つのイデアがどれだけの説明ができるのか、論証が曖昧であると批判した。またイデアは普遍者ではなく一存在者であるとも考えていた(今道友信「アリストテレス」講談社学術文庫)。実証主義者であるアリストテレスにとっては当然の疑問であったろう。アリストテレスは論証や推論の論理学を極めていくことになる。

[人間は動物である]「動物は死ぬ」よって「人間は死ぬ」。「SはPである」「PはMである」よって「SはMである」という真偽の判断を伴う形式論理学の三段論法を世界で初めて確立した。そして物事を実体、量、関係、性質、受動、能動などの分類(カテゴリー)にしたがって検証し、起動因、形相因、資料因、現実態、可能態に分けながら運動変化、生成消滅として事象をとらえようとしたのである。知の方法論を求めたといえる

アリストテレスを知ったのは、ヘーゲル「哲学史講義全3巻」(河出書房新社)を読んでいた時であった。熱心に語るヘーゲルの声を聞いてであった。最初は古代人アリストテレスの言葉使いに戸惑った。2300年前のアリストテレスが生きた世界に沿って読むことを気づいてからは楽になった。それにしてもデカルトやフッサールを彷彿させる〈疑う〉ことの知の世界。そして守備範囲の膨大なことに驚くが知の方法論がそこにある。(は)

追悼

鷹尾由香

4カ月の闘病生活を経て、家族の人達に見守られながら天国へと旅立って行きました。今でも、また会えるような、そんな気がしてなりません。思い返すと、9月に胃の不調を訴え、胃薬を渡した事がきっかけでした。普段、市販の薬を飲むような人ではなかったので、とても驚きました。その後、体調が悪くなるにつれ、より多く近くで接する機会が増えていき、いなほに行きたいという強い想いから、会長の送り迎えをさせて頂きました。それは、とても貴重な時間でもありました。その分覚悟しなくてはなりませんでした。

会長は話すのが大好きだったので、いつも会話をする時、何も知らない無知な私に、歴史の話や、脚を怪我する前、山を登っていた頃の話、ボルダリングをやっていた頃の話を、道中の車内で教えて下さったり、横浜の実家に会長を迎えて行った時、本を探してくれ見せて頂きました。毎回、横浜の実家に行くと、「上がってお茶でも飲んでいきなよ」と言ってくれ、一緒にお茶を頂いたりもしました。痛みが強い時、凄く機嫌が悪かったりもしましたが、とても辛そうな表情を浮かべていました。



ちょうど一年前、自分の病気の事を詳しく知りたくて、会長にその旨を伝えると、戸塚事務所で心理教育を開いてくれた事、感謝の気持ちしかないです。それまでの私は、会長の事を、そこまで知らなかつたので、勝手なイメージを抱いていました

徐々に会長の事を知っていく事ができていきました。

次第に、萌に行けなくなり、体調がいい日には戸塚事務所に来てくれました。病にかかる前、戸塚事務所にも来て欲しい、また勉強会をやって欲しいと言う事は伝えていました。戸塚事務所に来てくれる事は叶い、とても嬉しく思いますが、その分今でも、会長が居たという事を感じてなりません。

11月におこなわれた経営指針の発表会を、何よりも楽しみしていました。そんな発表会の当日、容態が悪く連れて行くのが難しい状況になりましたが、会長の想いは強く、経営指針の発表会を見る事が出来ました。その日を堺に、会長の容態は驚く程回復していました。病は気からという事を目の当たりにした瞬間でした。このままずっと長く生きられる様な、そんな気がしていました。容態が悪くなつた時は二回程ありましたが、それでも元々、人に頼る事が嫌いな人だったので、自分の事は自分でやるという人でした。日に日にそれも出来なくなつていき、「もう1人じゃなにも出来ないよ」と笑っていましたが、本当はそんな自分に情けなさと、苛立ちを感じていたと思います。意外だと感じたのは、会長は生きていたかった人だという事でした。そういう人だから、途中で生きる事を辞め命が亡くなる事は分かっていても、最期まで諦めずに精一杯、生きてくださいました。会長の生きた歴史は心の中で生き続けています。どうか安らかに眠って下さい。



波多江伯夫さんの思い出

關 六平太

1月18日、萌の会長（前理事長）である波多江伯夫さんが逝去された。享年67歳であった。会長が理事長職を退任されるときに「理事長の足跡」という萌の中で会長が何を成してきたかということを拙いながら文章にさせていただいたことがあるので、今回は僕の、非常に個人的な景色からみた会長との記憶を書いていきたいと思いました。ですので、これが手向けになるのか果たして解りませんが、僕自身の整理としても書いていきたいと思います。

大学を出て就職が長続きせず、ひきこもりになっていた僕はクリニックの先生から萌を紹介され、所長である久美子さんが僕をボラ

ンティアとして招いてくれたことが萌とのかかわりのスタートだった。僕が初めて会長に会ったのは今から8年前、ぽかぽかした3月の陽だまりのなか、会長は作業着とサンダルをはいて、Mさんというトラックドライバーの方と職員Uさんと、利用者数名と押し合いへし合い、休憩用のベンチを制作するための板をサンドペーパーで磨いているときであった。それはおおよそ理事長などという肩書とは無縁そうな、寡黙そうな、静かな姿であった。作業中にひっつきなしにタバコを吸って、おまけに咳き込んでいた。この人は肺を悪くしている人なんだ、可愛そうに。と思った。（のちにそれは杞憂だとわかったのだが。）サンドペーパーの使い方を利用者に説明するなかで意外だったのは「おたくは何度言ってもわからないねえ。」「おたくは嘘つきだからね」と利用者に話しかけていることだった。今から思えば当時の会長と利用者に互いに信頼関係があるから成り立つ軽口だが、当時の僕の障害者の捉え方からすると、障害者は健常者よりもストレスを感じやすく、社会的に弱く、可哀想な存在で、腫物に触るように丁重に接しないとなならないという固定観念があったのだ。しかしいまではこの会長の姿勢は理解できる。利用者も我々と同じ生活者で、共に生きる存在であり、合理的な配慮こそ必要だが、地域で生きる上では責任ある対等な存在であると認識しているからこそ（障害者というレッテルではなく、一人の人間と捉えた）発言かとも思うが、当時はずけずけとよく言えるなあ。と思ったものだった。

「明日もよければお邪魔します」という僕に「待ってるよ、汚れても良い格好で来な」と、応対してくれたのもMさんで、会長はただ、「疲れるよね」など、声をかけてくれていたがあまり多くを話さない人だった。僕の精神状態をしばらく距離を置いて見てきたのだろうと思う。また僕をどういう人間か観察していたのではなかっただろうか。利用者に対して乱暴にも思える発言を行なながらも、裏では人の気持ちを推し量ったりする細やかな一面も持ち合わせている方だった。

しかしそれから数年後、僕がグループホームの食費を計算している隣などで、会長は僕に回ってきた学習会の資料の作り方をレクチャーし、精神病院の看護師時代の話をし、四方山話もされるようになっていた。「会長。僕、今ちょっと計算してて。すみません。」などと言わないと、ずっと喋り続けている方だった。こんなに話好きとは8年前の僕も想像出来なかっただろう。



計画相談のモニタリングを行う会長。
生活・日中活動と丁寧な聞き取りを行う。



沢の農園で栽培した会長特製のイチゴ
ジャム。

当時のA型がパレット班で担当が所長、B型は主に農業で担当が会長と、いなほの中でも事業が分かれていた。僕は同じ年の4月にボランティアからB型の職員となった。当時萌は就労継続支援B型が出来たばかりで、今となっては定期的な事業となっている農業も始動したばかりであった。というよりも、農業しか作業が無かったのだ。

その時会長から、B型は仕事が少ないから利用者各々の作業を自分で考えて切り出しをするよう指示された。晴れている日は10余名でぞろぞろと農地に向かったのも懐かしい思い出だ。しかし雨の日は頭が痛かった。その10余名の特性を理解して作業の提供を行わねばならないのだ。明日は雨が降るとわかると明日の作業提供のために製材などを行って棚やベンチを作成するための材料を揃えたりした。しかしそれだけでは全員分の仕事にはならない。工場を回って掃除してもらう箇所を選んでおいたり、所長に製材等で人員が必要ではないか聞いたりもした。彼らが仕事をしている間に次は何を提供しようか考えていることが僕の仕事だったようだ。会長はよく相談にのってくれたが、作業提供を考えることはあまりしてくれなかつた気がする。しかし、僕のそばで利用者の障害について、半生について、作業の提供のしかたなどをずっとついてまわって教えてくれていた。どんな作業でも良いわけでは無いと言われたことを覚えている。集中が持続しない人への作業、身体的なハンデがある人への作業、認知機能に沿った作業。反復作業、粗大作業。様々なアプローチがあり、作業ができる上で、その次には本人の仕事へのやりがいや、また、貢献したという気持ちが所属意識というところに結びついてくると話されていたが、それは当時の僕には目から鱗だった。僕が前職を辞めた理由は所属感もやりがいもなかつたからだった。彼ら障害者だって同じだ。そう思った。また、障害者に対する非人道的な差別の歴史と、施設から地域社会へという考え方を當時福祉など何も知らない私に忘れてはならないものを気付かせていただいたと感じている。

作業を求めて通所する彼らに作業の提供を十分に行えないこと。金銭を生む生産活動ができないことなどは当時の課題であった。リサイクル業など世の中のためになるものと、利用者が行えるものを会長のユニークな視点で探し、横浜金属商事のパソコン解体や、発砲スチロールのインゴット生成などの仕事をとってきたのは会長だった。今現在のように萌の業種が多岐にわたり、利用者が自分の作業を選びやすいB型になるとは当時は全く想像できなかつた。発砲スチロールのインゴット、非鉄金属、木工等。パレットの次の収益になる仕事を取ってきて、B型勃興期の多くの利用者にさまざまな作業の機会を提供できた。その功労者は会長であると感じる。

横浜金属商事などは今でも一つの部門として残っている。現在配達業をスタートするにあたって当時契約した会社から仕事がもらえそうだという話を聞いた。会長の齋したものが新規事業にもつながっていくことに理事長も感謝したのではないだろうか。

亡くなられた斎藤さんと会長とは昔からの知り合いで、二人はよく喧嘩していた。若い職員に社会保険をという気持ちで凸版印刷のパレットの注文を取るため巨大なトレーラーを入れるように入り口の間口を広げるか否かという問題で激論を交わしていた。間口の拡大は大きなお金がかかったのだ。「そんないうなら俺はもう辞めるわ！」「君が辞めるのは勝手だ！」という具合に。ふたりは友人以上だったのではないかと思う。斎藤さんが亡くなったとき会長の涙を初めて見た。

次第にA型の経営が難しくなり就労継続支援はB型のみになった。A型の作業についていけずB型に来た利用者や物づくりが好きな利用者を集めて木工作品を作ったり、その売り先を展開するために会長は投資してくれたりした。パレットをみたり一人暮らし支援に携わったり働き方はなかなか定まらなかつた。メール便や非鉄金属をみたりするようになり、自立生活援助事業所(精神の方むけの訪問支援)を立ち上げてから会長の隣にデスクを置き、訪問対象者の状況を報告したり、長い時間支援について相談したり、話し合ったりすることは昔を思い出した。

今僕は会長に感謝している。様々な感謝である。その時代時代で感謝の質や種類も変わる。一言では言えない。引きこもりから救い出してくれた感謝、今現在仕事をしていて実感する、自らの経験から知り得た知識を早い段階から僕にたくさん教えていただいたことへの感謝。その知識の大部分を物差しにして今僕が仕事をしていること。所長に事実で咎められて僕が

キレたとき、会長がとりなしてくれたこと。ジャズを聴きに連れていってくれたこと。よく飲みに連れていってくれたこと。しかし長い年数の中で確執もあった。障壁に感じたこともある。会長は僕をどのような目で見ていたのだろうか？僕を使いづらい人間と思ったこともあるだろうと思う。しかし僕の未熟な部分に目をつぶって、よく堪えて育てくれたといまになっておもう。一つだけ確かなことは、何があっても僕をクビにしなかったことだ。

様々な思い出がある。フォークリフトの免許をとったばかりの頃、ベニア切断を行う機械に追突して機械が丸1日使えなくなり、翌日日曜日怒られながら所長と会長と僕で製材を行なったこと。3月の繁忙期には会長も所長も斎藤さんも必死になってパナソニックの大きなパレットを打った。作業が終わらずに真夜中までかかって、皆で萌で寝たこともあった。会長と二人で泊まったときは、二人で晩酌し、酒が足りなくなり、斎藤さんの仏壇にあるお供え物の焼酎にも手を付けてしまって、翌日利用者のIさんに二人で怒られたのも思い出だ。

4トン車がまだ無かった時代には平ボディーのトラックを工場に乗り付けて荷積みし、雨が降っていたら製品の上に幌をかけなければならず、職員総出で行なった。ドライバーが一人しかいなかつた当時は会長もトラックで配送に出ることが多く、「配送はいやだなあ」とぼやいておられた。

利用者とLINEを交換した時にはかなりこっぴどく怒られた。現在よりももっと強い熱意で会長や所長は利用者支援を行なっていた。それに水をさすな、何も知らないのに僕らの支援の邪魔をするなということだったと思う。「辞めて貰いたいぐらいだ」といわれ、こちらも「辞めますよ」と言ったこと。みんな必死だったのだ。今になってやっと当時の会長や所長や斎藤さんの気持ちがわかるようになった。支援で挫折し、自分に自信が無くなることもある。支援とは、人に寄り添うとは大変なことだ。自分の気持ちが近づいてきたのかもしれない。

8年前、眼光が鋭く、切れ物のような感じもあった会長も、理事長が業務を引き継いでいく中で次第に穏やかに変化していったように思う。蜂蜜を作ったり、羊羹を作ったりする時間も多くなった。相変わらず頭は良かったが。本もたくさん読み、もうこれでよしとは思わない方で足りない知識をいつも埋めたい、知的欲求を満たすことの好きな方ではなかったかと思う。

所長と話した時に、「会長は私の頭脳」と言ったことがあった。確かに。会長は福祉に関する、作業に関しても萌の知恵袋だった。萌の礎は、所長、今は亡きSさんと共に会長が作った、決断してきた成果が今日まで息づいている。

亡くなる直前まで頭脳は明瞭で、常に萌の行末を心配されていた。17日に所長と理事長から連絡があつて「關くんに話したいことがある」ということだった。夜も遅いので明日伺いますと連絡した。18日の翌朝伺ったときには痛みが極点に達しておられる様子で、「それどこじゃないよ」という返答であった。所長が座薬で痛みを止めておられたが10時過ぎには声を出すことが困難な様子であった。在宅の先生がこられて注射をしてもらいますよ。という僕の言葉に指で丸を作り「あとで」（先生に注射をしてもらったら話すよ）という反応があったので、声は届いているのだという安心があったが、注射を打った段階で痛みがひいたのか話せなくなり声も届いていないかわからなくなってしまった。職員Tさんが届けてくれたコンボで、かつてお好きだった井上陽水とクラシックがずっとかかっていた。まるで痛みそのものが会長の感覚を正常にしていたかのようだった。仰向けて息をすることで精一杯という様子で、その状態が10時間以上続いた。何かを伝えなければと思うのか、痛むのか、何度か力を入れて起き上がるようとする。しかし言葉を発することはできなかった。亡くなる直前に口を動かして何かを語ろうとしていたように思う。しかし、会長が僕に何を伝えたかったのかわからない。けれど、亡くなるまでの数ヶ月間「關くんと話せて良かった。」とか、僕に子供ができる事を知って「關くんがおとうさんになるんだ。」と感慨深そうにし、「大丈夫だよ。關くんなら。みんな不安だよ。」と僕を案じてくれたりと、感謝の言葉を常に口にすることが多くなっていたことからも、きっと今後の僕を叱咤するか、しっかりしろという鼓舞の言葉ではなかったかと思っている。また一つの歴史がすげていく。会長は残される我々に大きな足跡を残してクラシックの旋律のなか天に登っていった。

看取り、葬儀での納骨まで列席させていただいて所長、理事長には感謝しかない。

若かりし頃の写真は萌での会長ではなかった。夫であり、父だった。家族のことが好きだったことがわかった。登山の写真もあった。端正な顔から覗く二つの目は深遠を見るようでいながらもとても無邪気で愛嬌がある目だ。そんな魅力的な人であった。



斎藤さんの蔵書を整理するために本棚を作っているところ。友人である斎藤さんの知識や触れたものの保管に務めていた。



会長が育てた日本ミツバチから採れた混合物の無い純正の蜂蜜。僕よりも妻が先に食べつくしてしまった。ナチュラルな甘さが特徴だった。



助成金で購入した竹炭製造の窯で作った竹炭。岸根公園のイベント等で販売したが、安定して売れる商品。靴箱に置くとかなりの消臭効果がある。パッケージデザインは当時在籍していた職員の手によるもの。



身体が動かなくなることを見越して、門松で使用する竹の選定の仕方を職員に伝授する会長。竹林整備も会長が行っていた作業である。

会長との思い出のエピソード

利用者の方々に話を聞いてみました。

Nさん 会長は何も話さないけど、いつもパレット班の話を聞いていた。パレットの台を一緒に作った。

Yさん 7年前、一緒にパレットを作つて一緒に仕事をした。感謝している。

Kさん 計画相談をやってくれた。去年Mさんとの問題で、注意を受けた。

Mさん 良くパレットの相談に乗つてもらった。

Iさん 煙で採れた玉ねぎと、にんにくをぶら下げつて、怒つた事がある。いつも、暖炉の所で、コツコツと仕事をしてて頑張つてゐるな。と思った。



Oさん 計画相談をやってくれた。グループホーム独歩の話を聞かせてくれた。

Nさん 一緒にたけのこ掘りに行った。ちらし寿司を作つた。計画相談をやってくれた。

利用者の皆さんも、会長との思い出がありました。アンケートに答えてくれた皆さん、貴重な話を教えて頂き本当にありがとうございました。

波多江伯夫を偲ぶ……波多江久美子記

私たちの出会いは 24 歳と 25 歳の時・・当時はまだあった新日本文学会横浜分校であった。伯夫は激しい文体の小説を書き、わたしもよくわからない詩を書いていた。共通の話題は文学であった。その後、私は福祉の道に、伯夫は精神科看護の道を歩むことになる。当時の時代には、まだ「三里闘争」があり、お互いにときを同じくして、別々の所属でその「闘争」に参加していた。学生運動と社会運動が衰退し、どうしようもない虚無の同時期、同時代を生きてきた。農業との出会いはだから 2 人とも援農である。そして、お互いにそういう「闘争」の世界に疑問を持ち、この腐りきった社会は梃子でも動かない、無力感や虚無感も、共通の意識であった。

普通の男女の恋愛とは少し違って始まった。二人の共通項は、自分の生き方は自分で決めたいということ。二人の人生は悪戦苦闘の連続であった。私が萌を作り、伯夫は精神科看護を辞めて、不本意？ながら理事長になってしまった。それ以来、萌の頭脳であり続けた。伯夫は非妥協的に理念に生きた人間である。妥協は一切許さない人だった。

国が自宅で看取る時代を言うが、自宅での看取りとはそんな美しいものではない。献身的な愛情を持って看病したかと自問すると、愛憎乱れた闘病生活の格闘であった。

意思決定支援は大切であると言われていて、自分もそれを言う立場である以上、それは日常生活でなされなければいけないという、自分の福祉への理念があった。だから伯夫の意思決定を尊重することにした。ただ、意思決定支援の日常とは、実にしんどいものであった。

伯夫は 30 代に糖尿病が分かり、晩年縁内障で視力を失っていく。車を手放し、中区の自宅から通うのは、夜道が見えず、文哉に理事長を託すとき時に、いなほの近くに社宅を作りそからいなほに通っていた。農業を地域作りの根幹に位置づけ、365 日休むことなく畑に通っていた。皆が休んでいるときにも、畠の草取りやタネうえをやって過ごしていた。竹林の保全活動を始める時には、「筍学校」に行き竹について学んでいた。農作についても本を読みこんでいた。養蜂を始める時にも研究に余念がなかった。

職員の研修にも何冊も冊子を作っていたが、同僚の S 氏が無くなつてから、積極的にはやらなくなつた。勉強に不熱心な(と本人は思っていた)職員も中にはいて、もうやりたくないと言って、自分の作成した資料をすべてシュレッターにかけ、S 氏にとめられていたのを今も思い出す。

ただ、2011 年に作成した経営方針にあった事業はすべてやり遂げている。最後の目標のグループホーム設立もやり遂げた。計画相談が始まり、他の計画相談事業所の計画案を批判し、自前で計画相談事業所を作る。ここ 2 年は、計画相談に福祉の原点があるといって取り組んでいた。自宅や住まいへの訪問、とりわけ精神障害の方への支援には手厚いものを感じている。亡くなる前に、グループホームが通過型になるらしいという、ある動きに憂慮し、批判をしても始まらないから、新たな構想を立てていた。その構想についてはいなほには書かない、まねされたくないから、と言っていた

体の不具合を訴えたのは、7月下旬。薬嫌いなのに珍しく「胃が気持ち悪いから、薬はないか」と聞いてきて、珍しいなと思っていた。太田胃散やキャベジンを飲んでいたというので通院を進めたが、医者嫌いなので行こうとはしなかった。8月は草取りに余念がなく一人で炎天下で草取りをしていた。8月23日、やっと工房いなほの近くのクリニックに通院し、1か月分の胃薬と9月10日に胃カメラをやると言ってきた。最初から胃薬を一ヶ月だし医者はおかしいし、胃カメラはすぐやってくれる医者が自宅の近くにあるのでそこに行くように勧めたが、聞かなかった。8月27日を過ぎると、いままで7時過ぎには工房いなほに来ている会長が8時半過ぎに来ている、昼も事務所で昼寝している、おかしいですと職員から情報が入った。8月28日土曜日にかかっている医者で胃カメラをやれるように調整したが、具合が悪く行かれなかつた。自宅に戻り、私の行きつけの病院にいくよう勧めるが動かず。クリニックに9月の早い時期に胃カメラをやるよう調整。胃カメラの結果と、腫瘍マーカーから9月3日に十二指腸に癌があると言われてやつと自宅に帰つて來ることになった。立ちくらみが激しく胃や背中を痛がり、それでも自力で自宅に戻る。私の行きつけの病院で始めは、乳頭部の癌ではないかと言われた。MRIや内視鏡などの検査を、歩くのも辛いのに、毎日歩いてタクシーが行きかう道路まで、歩いていっていた。途中何度も座つては痛みをこらえていたが、絶対に人の手はかりたくないというオーラがすごくて、見守るしかなかつた。胃と背中の痛みがひどかつたが、背中の痛みは腰痛だと本人は云つた。検査結果は、「膵頭部癌」ステージIV。即入院を言われたがそれを断り、入院を1日伸ばしていた。いみじくも私の誕生日9月14日に入院となる。目的は痛みの緩和と血糖のコントロールである。しかし3日たち痛みがコントロールされたら、退院を自分で決めてしまつた。その時に「これで死に方が決つた。人は突然死ぬか、認知症で老衰するか(私の母)これは周りの人が大変なので嫌だと思っていたので、死に方が決まってよかった」「痛みが無く眠るように死にたい」と言われた。もうこの時に日常生活を自分でくれないようになつていた。

9月下旬、自分(会長)が担当して計画相談のサインをもらいに、車に乗せてもらい言つた。この時には、痛み止めの麻薬を5回くらいは飲んでいた。

なのに、次の診察日までは痛みがひどくても嘔吐していても絶対に通院はしなかつた。「計画相談はどうなる?農業もおしまいか」と仕事の話が多くなつてついた。

麻薬は始めから使用し最後まで使用することになつた。

10月5日に癌が胆管をふさぎ、胆管炎を起こしていたので、胆管にステント入れる手術のため入院。しかし十二指腸に癌が盛り上がって來いたため、再手術。10月11日「退院したい」とメールがきた。15日に退院してくるが、気持ちが悪いと嘔吐することもあつた。あまりにも体調が悪いので病院で点滴を受けたこともあつたが、周囲の入院の勧めを、「自分のことは自分で決める。余計なことはするな」と怒られた。

それでも24日に萌の畑を見に行く。翌日起きていられず、息子におんぶされて通院。

十二指腸からせり出した癌が今度は胃をふさいでいるとのことで、十二指腸にステントを入れる

手術をおこなう。この時に余命「2~3か月、年を越えればよい」と医師から言わされた。この入院の際、肺炎を起こして退院の見通しが立たなかった。本人は抗がん剤を投与しないと大本が残るので、抗がん剤の1回目を打ってから退院すると言って、おとなしく入院していた。

11月16日に理事長の経営指針の発表に向けてなんとか体調を整えようとしたが、体力が追い付かず、2回目の抗がん剤は11月30日まで打つことが出来なかつた。そんな中、19日いなほや畑に行く。20日岸根公園バザーに行く。26日いなほでの経営指針は発表会にも出席している。少し体調が良いとパソコンで書き物をし、見舞客が来れば話をしていた。ただ、家族だけになると、嘔吐、気持ち悪さや痛み、モノを動かすのも私を使った。足のむくみが見られるようになり、12月に入ると、うとうとして過ごすことが増えた。しかし、12月6日にいなほふかやに行っている。10日には職員研修でふかやに。



足首から下はむくみがひどく歩くと重たいと。「体が癌に支配されている」と言っていた。しかし、12月17日ふかやに職員研修をしに行く。工房いなほの夜の食事会に参加。

足から先は象の足だった。むくみはふくらはぎまでやってきていた。なのに、20日ふかやといなほへ行く。どんなに痛くても気持ち悪くても、絶対福祉ベットには横にならず、居間の小さなソファーに座り、耐えていた。人が来れば話、理事長が来れば話、ただ、その後は寝てしまうことが多くなる。動くのもだるかったのだろう。疲れていた私は早くことを済ませようとする、私にせかすなと言って怒っていた。うとうとしていて、起きるとどこに寝ているか分からぬという。24日に至っては、38度も熱があるのに、萌に行く日だと車に向かいに来させて、ふかやに研修をやりに行く。その執念は凄いものがあった。12月27日に低血糖で意識が混濁化し、救急車を呼んだ。ぼんやりしているはずなのに「なんで呼んだんだ」とまた、怒られた。何回も同じことを聞く救急隊員にも「何回同じことを聞くんだ」と怒っていた。



次の日が3回目の抗がん剤投与日だったから、そのまま病院にいてくれればと思ったが、点滴を点滴して、意識が戻ると、家に帰ると言って、帰ってきた。翌日は具合が悪く通院できず、私と二男で、医師の話を聞きに行く。もう以前から「そういう状態は入院ですよ」と言われてきたが、「もう治療はない、今回は退院はない」と言われて、在宅医療に変更してもらう。本人に訪問看護もつけるというと、「また、どうして勝手にそういう事をするのだ」と、怒ったので、医師の言っていたことを伝えざるを得なかつた。それでも、30日ふかやに行く。家に帰れば寝ているだけの状態であるのに。その夜、入浴中に九州のおさな馴染みの友人に電話しろと言われて、その友人に電話を掛けた。その方は日帰りで31日に福岡からやってきた。そして、息子をよんで、一緒に萌を案内していた。

1月は車イスでふかやに行くから、車椅子をレンタルしてほしいというので、正月明け車イスをレンタルした。それは1回、7日にふかやに研修に行くために使用しただけで、二度と使えなかつた。服を着るのも介助が必要で一人で立つことも辛くなり、腹水もかなりたまつたが、8日、最後となるいなほ原稿をパソコンでうつ。

12 月中旬になる便秘がひどくなり下剤を飲んだが効かず 結局、お腹は苦しく、浣腸するしかなくなるのだが、訪問看護呼ばなくてよい、自分でできると夜トイレで一人で試みる。がダメで、翌日苦しさが募り、私が訪問看護を呼ぶと言うと「強権的だ、勝手に呼ぶな」と怒り大喧嘩になった。しかし、ついに苦しくて呼ぶことにはなった。浣腸の後、「看護師の時に浣腸を打つ方だった。こんな恥ずかしいものとは、思わなかった。患者の気持ちなど分かっていなかった」とつぶやく。

亡くなる 2 日前にお腹が苦しくて、腹水を抜く。4 リットル抜いた。歩けなくても、亡くなる前日におむつになんでも、トイレは私の肩を借りて、自力でいっていた。

入浴も最後まで、自力でできるように、椅子をレンタルしたり、簡易な取っ手をつけることを望んだ。亡くなった 18 日の前の夜は痛みでひどく苦しんでいた。それでも、朝ベットからソファーに移動させろと言われて引きず

るように移動させた。苦しかったのだろう、戻ると言いその時に、「もうここに戻ることはない。この意味は

君はわからないだろう。君も楽になれる」と。ベットに横になるときに「役割が分かった。君は知らなくてよい」その後、痛み止めの座薬が聞き、眠るのだが、いつたい何の役割かずっと、考えてみた。

9 月の時に福祉の総論が見えてきたとしきりと言っていた。多分、萌での自分の役割だった気がする。何時も、そういう考え方をする人だったから。伯夫は人に話すときは丁寧で優しく話したが、私に対しては人の評価には厳しく、現実に対する嘆きの言葉は直球であった。激しい気性があった。

同僚の S 氏が無くなった時に、送別に中原中也の詩を書いて、終わりの言葉についていた。私達が好きだった中也の詩を私も贈ろう。私が一番好きな詩を……



月夜の浜辺
中原中也
月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちていた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
なぜだかそれを捨てるに忍びず。
僕はそれを、袂にいれた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちていた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
月に向かつてそれは抛れず
浪に向かつてそれは抛れず
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、拾つたボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

闘病中、最初は嗅覚が敏感になる、「この家に何かに臭いがする」というのだ。失礼な人だと内心思ったのだが、次に現れたのは味覚異常・これは最後まで・あった。ある時にはバナナ、あるときにはミカン、お煎餅、かまぼこ、これが食べたいというので、これを作ると、やはりあれだという。作った物ではない物を言ってくる。卵焼きだったり、うどんや蕎麦であったり。ただ、油を含んでいるものは、最後まで食べられなかつた。和菓子やケーキに少しでも油を感じると食べられなかつた。便秘対策に牛乳に執着した頃があり、牛乳好きな長男と取り合うように飲んでいた。牛乳がないと「また、やつが飲んだな」と怒る。最初から最後まで好きだったのは日本茶である。理事長が波多江の食べ物の好みに合わせて、その都度、いろいろ買ってきてくれた。

ジュースは飲んだが、天然のジュウサーで作ることを好んだ。栄養ドリンクやすすめられたパルテノンのヨーグルトはあまり食さなかつた。手作りのコロッケも喜んで2つも食べててくれた。ひたすら、食事作りの専念した5か月だった。

最後の頃は触覚が敏感になり、ちょっとしたザラツキがきになっていた。

自然療法の、こんにゃくを温めて肝臓と丹田を温め（30分位）背中の腎臓を温める（30分位）療法、これは亡くなる1日前まで好んでやるように言われた。熱くしたこんにゃくが段々さめるにしたがって、引いていたタオル一枚ずつ取っていくので、結構重荷だった。この療法がきくよと言い出したのは私なのだが。ただ、これをやるとよく眠れるというのでやり続けた。痛むときにもこれを頼むという。亡くなる朝も痛みがあり、やるように言われてやっていた。

嘔吐が激しい時には、葛湯をおいしそうに飲んでくれた。やはり、自然の力は凄いのだ。

・・・亡くなった部屋・トイレから今も麻薬の臭いがしてくる・・・・

私にとって波多江伯夫は子供の父親でもなく、萌の会長でもなく、決してロマンチックとは程遠い存在なのだが、共通の時代、ある共通の想いを抱いて過ごした1人の人間であったのだと思う。伯夫自身の治療の在り方も最後まで口論になった。我慢強さが、私には耐えられなかつたので……「また、喧嘩だよ」と言っていた。

亡くなる2日前、「入院したほうがよい君が萌に行かれないから」。「だって、入院いやがるよね？」「事態が変われば、在り方もかわる」「これはすべて想定された事柄だったから、いまさら入院にはさせないから」

波多江久美子

編集後記

萌の創設時代を知っているのは、ついに私だけになってしまった。亡くなる前に「猫を飼えばよい」としきりに言っていた。友人もいなく寂しかり屋のわたしが、二人で過ごしてきた時に一匹の猫をたいそうかわいがっていたのを知っている。だから猫なんだね。でも、あなたの代わりはどこにもいないんだ。もう口論できる相手はない。(所長)